

記憶の呼びおこし法について

——波多野ヨスミ女の場合——

佐久間惇一

昔話の研究には語り手を抜きにしては完璧なものになり得ないと思っている。特に一人で百話以上も語る語り手は、実は特殊な伝承者タイプの人で、普通の人と違って昔話に対して深い関心と興味と記憶をもっているとは、水沢謙一氏の説くところであるし、私もそう思う。

私は新潟県の下越地方の昔話採訪を永年つとめてきたが、たまたま隣町北蒲原郡豊浦町切梅に波多野ヨスミ女（明治四十三年—昭和五十五年）という優れた昔話の語り手にめぐり会うことができたので、この人を語り手研究の対象に選んだ。語り手を理解するには、単に学術用語の昔話に限定することなく、語り手の保有する伝説から世間話にいたるすべての話種話柄を採録するとともに、語り手のライフヒストリー及び語りの行われた地域社会をトータルに把握することを第一歩と考えてそれらを着々と実施した。

ヨスミ女の全話採録は昭和五十一年六月から始めたのであるが、同五十五年五月、同女が逝去され全話採録は半ばにして挫折してしまった。しかし同じ話を含め直接採訪し得た話数六二七話であった

が、本人の遺したノートなどにより本人の話袋にはまだ語り残した話柄の多くあったことを考えると、同女は全国的にもたぐい稀な語り手であったことを思わずにはいられない。

今回は、私が聞き得た本人の生前の談話と、本人が書き遺した昔話ノート及び昔話関係メモ類をもととして、ヨスミ女の記憶呼びおこし法について述べてみたい。本人は次のように語っている。

①自分の家のまわりの山や川の景色に結びつけて話を覚えて語る。

例えば、桃太郎の生まれる桃の流れてくる川は家の前の小川だとか、花咲翁の咲かせた桜は村の往還のあの桜の木だとか、話を聞くときに具体的な山や川や木に当てはめて想像しながら聞いている。そうすると、話の筋がキチンと整理されてくる。今度自分が語るときは、風景を思い起こすことで、語りが生きて甦るといふ。

ヨスミさんは、「多く語るときは覚えてはいるが、話す機会が途切れると忘れてしまう」という。また「忘れたと思うと、一所懸命考える癖がある。思い出す努力をする」という。記憶を呼びおこす方

法は、「家で留守居をしたり、炊事をするようになって、昔話を思い出そうとして眼をつむって考えていると思ひ出す。」という。

アメリカのルース・ソーヤーも『ストーリーテラーへの道』⁽³⁾で同じようなことを言っている。「お話の覚え方には、一語一語暗記する方法をとるか、あるいはとらないか、その二つしかありません。ところで、はなしを暗記することはたいへん危険なことだと思ひます……伝承芸術では暗記することはまちがっていると、私は確信しています。」と。そして「お話全体を覚えるためには、できごととできごとをつなぎ合わせて話の全体をきぎみつける。または読みながら全体を絵にして覚える」といっている。

「話をまわりの景色に結びつけて話を絵にして覚えることは、ヨシミ女一人の記憶の呼び戻し法ではなかったのである。

②父母にねだった話の題を思ひ出すと、その話の印象的な場面や父母の語りの決まり文句が甦ってくる。

語り手のつけた題は、記憶を呼び戻す鍵の作用をしている。話者のつけた題名の重要性は昔話研究にはすでに常識となつていていると思ふので、ここでは特に詳しく触れない。ところが、ヨシミ女には同じ話でも違った題をつけているものが幾つもある。例えば昔話大成五一五・話千両が「話買い」、「三つの八卦」というようにである。

③嫁という言葉から蛇の嫁・鶴の嫁・猿の嫁・蛙女房と次々と思ひ出す。鳥の名称・種類で、糸をたぐるように鳥の出る昔話が續いて出てくるという。

④ムカシの中の決まり文句、印象的な言葉や歌の文句で覚えている。例えば、昔話大成二三A・鼠退治の「丹波の太郎吉、西国の才吉」、

昔話大成一八八・鳥吞爺の歌「錦サラサラ、五葉の盃、コヤチウ、アヤチヨウ」。これらの詞句をたよって話を思ひ出すという。

水沢謙一氏も『昔話ノート』⁽⁴⁾に、「百話以上の語り手の特色」の一つに、記憶の仕方の一つは、話のつよいイメージ、印象的なシーン、心に残る印象的な中心の言葉、うたなどのポイントをよく覚えていて、それがきっかけとなってムカシを思ひ出して、と記しておられる。

⑤ムカシを語っていると、他の話を思ひ出すという。

これは水沢謙一氏も「ある一つの話を語っているうち、しぜん、あるいは急に別な違った話を思ひつく。語り手は昔話の世界にすっかり入りこんであれこれの話を思ひ出してくるものである」と記しておられる。⁽⁵⁾

文字を使わない記憶呼び戻しの鍵には武田正氏が紹介された山形県の『佐藤家の昔話』⁽⁶⁾の棒木によるものがある。これは珍しいことなので少し長い引用紹介しておきたい。

一尺二、三寸の薪のような棒に、話を記録し保存したことである。「嘘の語郎」をテーマに「語郎のむかし」という番組をNHKのスポット・ライトに組んでもらい、鈴木健二アナウンサーの聞き役、ゲストに眞壁仁氏と私（筆者注・武田正氏）が入って作ってもらったことがある。その折に無理にお願いして、思ひ出せる限りの棒木を復元してもらったが、コシアブラの木の皮を四角に三か所削りとした棒木は「三枚のお札」、二か所削りとした棒木は「二反の白」、ねじ木はそのまま蛇のような形をしているので、蛇をテーマにした「蛇髯」「蛇女房」「伝説・おりや峠の蛇」など

の棒木ということで、全部で四十種ほどの棒木はテレビの主役でもあった。関敬吾博士の御教示によれば、朝鮮には菓を結ぶことで記録した方法があり、沖繩には菓算と称して菓で村の人口や数の表示したものがあつたということであるが、それに類するものではなからうかということであつた。

祖父の権六は孝一さんから昔話を所望されると、長押にかけられていた棒木を一本持って来させ、それを見ながら、あるいはそれを昔話の小道具に使って、あるときは火吹竹になり、あるときは刀になり、扇子になったりして、語りが行なわれたという。しかし、残念ながら同じような例はまだ他所で発見されていないから、佐藤家独自のもの、あるいは祖父権六のアイディアに過ぎないという意味づけしか、今のところできないでいる。

以上は、文字によらない場合のことであるが、口承文芸といつても現代の語り手は文字を持っているわけで、それを活用している人はごく多い。水沢氏の接した何人かの語り手がメモをしていたものもいふ。

ヨスミ女は次のようにいつている。

⑥昔話をノートに書いてみると、よく思い出せる。

ヨスミ女が残したものは、昔話ノート十五冊。その大学ノートには語り口そのままの昔話三九七話を記している。その一話ごとにメモがついている。次にノート題名の記されていない「昔話覚書」ともいふべきもの一冊、この冊子の内容は、話者の題名と、梗概、モチーフ、要素などを五九四話につき記入したもの。これらのメモは記憶呼び起こしの鍵となつていてと考えられるので、そのすべてに

ついで一応次のように分類集計してみた。

1 梗概・モチーフ

約四七八

2 要素

約九六

3 印象的な言葉や歌・唱言など

約五〇

4 その他

約二二

1の梗概・モチーフといつても、梗概のすべて、或いは主モチーフが完全に記されていることはまずない。その一部だけである。また、モチーフの一部と要素の一部を一緒に記入していることもある。3の印象的な歌などの一部の記入のあるものもある。

2の要素というのは、登場人物の氏名、動植物名、また、例えば昔話大成五二三B・蟻通明神の話であれば、三つの難題の題名が記されている、などである。

3の印象的な言葉・歌の内容は説明の必要はないと思う。

4のその他は、その話の出所、出典、思い出したきっかけなどが書いてある。例えば、昔話大成一七九・竜神と釣針の話には、「古事記から」とか、話者題名「巻機山の伝説」では、「新潟日報に串田孫一の書いた巻機山を見て思い出した。母が兄嫁に機の巻き方を教えていたときに聞いた話」などと、直接その話の内容に触れてないものも多い。こうしてみると、こういう分類方法では解決しない課題だということがわかる。

ヨスミ女は、メモは同じような話が混同しないように、また、その一部が脱落しないように書いていともいふ。

従つて話すときの目的や事情によつてメモの内容が変り、繁簡も出てくる。よく覚えていた話を語るときはメモはいらない。同種の

話を続けて語るときは混乱を防ぐためにいろいろなメモが作られる。

例えば、昔話大成二四〇・三枚の護符をヨスミ女は一〇話も知っている。これらのメモ（附表）は次の通りである。枚数二一枚。

1 梗概・モチーフ

一四

2 要 素

四

3 印象的な言葉・歌など

三

といういろである。

附表 波多野ヨスミ 昔話メモ「三枚の札」

① (太郎とみどり)

○ 逃げる途中、鴨になって湖を越す。鷺にさらわれたみどり

(五三、一一、四)

○ ワシにさらわれる。捨てる。(四五、一)

② (桃源の里の三枚の札)

○ ポテ売り、桃源の神、(四五、一)

○ ポテ売り、桃源の里、三枚の札、目、足、麦の穂(五四、一、一九)

③

○ 小僧の栗拾い、ババいいか、魔法の鏡で見る。和尚様、身体

中にお経書く、耳忘れた。耳ごげだと。もいだ。片耳となる。

(四五、八)

④

○ 栗拾い、雨だれ、テンテン寺の小僧、顔見る顔見る。三枚の札。納豆になって和尚に食われる。(五三、一〇、四)

⑤ ○ 栗、ダルマ教える。雪隠の神様から三枚の札もらう。片耳食

べられる。(五三、一一、四)

○ コーカオ、コーカオ、花折りねいごだい。小僧小僧ババいいが。(四七、一一、五)

○ 小僧、彼岸花とり。雨だれ知らせる。鬼婆さ納豆になる。

(四五、八)

○ 彼岸花とり。和尚様三枚の札。鬼婆。雨だれ。てんでん寺の

小僧顔見る、顔見る。納豆になって和尚に食われる。(五三、三、一六)

(四五、八)

○ 鬼婆。雨だれ。納豆。(五三、一一、四)

○ 納豆(五三、一一、四)

⑥ (櫛の歯三枚)

○ 霜ごけとり。子供の股を食う鬼婆。母の形見の櫛の歯で鬼婆

さを退治する(四五、二)

⑦ ○ (メモなし)

(三本の櫛の歯)

○ 母の形見の櫛の歯で鬼婆を退治した。(五四、二、一三)

⑧ ○ 貴人の櫛、鬼、仏となる。(四五、三)

○ タラの芽かき。福餅。小僧ババいいが。一羽の雁となる。

木魚となって命助かる。(四五、二)

○ タラの芽とり、福餅。雁。鴨。木魚。煮豆となって和尚に食

われる。(五三、一一、四)

⑨ ○ (メモなし)

(月の輪熊)

○ 三四の子熊と母親の命を救うた。熊神からもらったお守り札

三枚。ヤブ、大川、大火事。後の人は月の輪熊という。

(五四、二、二三)

〔熊の守り札〕

○三匹の子熊の命を救うたお守り札三枚と母熊。(四五、五)

⑩ (山猫大将と三つの玉)

○黒は木に、水色は湖に、赤は火の鳥に形や姿の変る三つの玉

を赤猫からもらって命助かる。(五三、一〇、四)

(山猫の三つの玉)

○一郎赤猫を可愛いがる。小僧となつたとき命を助けられる。

(四五、四)

メモのものとの原話の内容を簡単に説明しよう。

③の話は、小僧が栗拾いに行き、鬼婆さの家に泊まり、便所の神様から三枚の札をもらって逃げる。そして札を投げて、大藪・大川・大火事を出して寺に逃げ入る。和尚は小僧の身体中にお経を書くが、片耳にお経を書き忘れて片耳をもがれる。後年耳なし禪師になる。

④は、鬼婆さの家に泊まった小僧に雨だれが「テンテン寺の小僧、顔見ろ、顔見ろ」といって鬼婆さである事を教える。寺で鬼婆さは和尚にいわれて納豆になって食われる。あとは③と同じ内容である。⑤の内容は、鬼婆さの家で置物のダルマが危険を教えることが加わるだけで、あとの話は③と同じ話である。

あと⑤の残りのメモは、④乃至⑤の話と内容はほぼ同じだが、メモはいろいろである。モチーフの一部と要素と一緒のものもあれば、「テンテン寺の小僧、顔見ろ、顔見ろ」と印象的な言葉を書いている

ものもある。「納豆」の二字しか書いてないメモもある。

⑥の話の話者の題は「櫛の歯」「三本の櫛の歯」といっている。霜草を探りに行った小僧が鬼婆に追われ、母の形見の櫛の歯を折って投げると、鬼婆の右の眼に当たり、二本目は左の眼にあたり、三本目は喉笛に当たって小僧が助かる話である。

⑦の「貴人の櫛、鬼、仏となる」とある話は、櫛の歯を投げられたが、鬼婆は死なずに生命が助かって、よい人間となって、仏に仕えるようになるという話である。

また、同じような話で、便所の神様から三本の釘をもらう話がある。これは一本の釘は足、二本目は眼、三本目は喉笛にあたる。そして鬼婆は退治される。これはメモの記入はない。

⑧の話は、お札を投げて小僧が変身する話である。福餅というのは鬼婆の家で食べさせられた蛙の煮物のことである。便所の神様からもらったお札をなげて雁となって大山を越え、湖を鴨になって越える。お寺に着いてお札によって木魚になっていると、鬼婆さがきて、煮豆になって和尚に食われる。

⑨の話は、話者の題「月の輪熊」「熊の守り札」である。話の梗概は三匹の子熊が生まれ、熊神様が子熊に三枚のお守り札を授ける。子熊が猪に襲われる。お守り札を投げて藪・大川・大火事を出し子熊は助かり、火事で猪は焼け死ぬ。お守り札を包んで首にかけていたあとが熊の月の輪となったという話である。

⑩の話は、話者の題名は「山猫大将と三つの玉」「山猫の三つの玉」という話である。旅の母と子が寺の門前に休む。母急死して、子は赤ヨモギ猫を残して寺の小僧となる。小僧成人して僧となり旅

に出る。旅先で道に迷い、以前世話をしたことのあるヨモギ猫の家に泊まりあわせる。ヨモギ猫は山猫大将の妻となっていて、恩返しとして黒・青・赤の三つの玉を贈る。僧、山猫大将に追われる。黒い玉を投げて立木に変身、青い玉で湖になる。赤い玉で火の鳥となり、山猫大将は焼け死んで僧助かる。

①の話は、昔話大成二四〇・三枚の護符と大成一四八・鷲の育て子の習合した昔話である。鷲にさらわれたみどりは木挽夫婦に育てられ、夫婦の実子の太郎とみどりは山中に捨てられる。二人の子供は山中に尼僧から三枚のお札を授けられる。鬼婆さんの家に泊まるが身の危険を感じ逃げる。鬼婆さんに追われ札を投げて鳩になって大山を越える。次に札を投げて鴨になって湖を越す。村の法事をしている家で飯をもらい、赤坊を描いた絵札を見せる。みどりはその家の鷲にさらわれた子とわかる。太郎とみどりは結婚して幸福に暮らす。

②の話者の話題「桃源の里の三枚の札」は逃さん譚ではない。異郷訪問譚である。ただ三枚の札が出てくるのであげた。

足の悪い親をもつ眼の悪い籠売りの兄が強盗に遭い谷に落ちる。そこは桃源の里で、そこに住む娘に助けられ、娘の家で働いているうちに娘と相愛の仲となる。桃源の里の神様が二人を許し逃がしてくれる。神様からもらった三枚の絵札のうち、足の絵で親の足がよくなり、眼の絵札で兄の眼がよくなる。麦の絵札で食糧ができて、幸福に暮らすという話である。

以上の話のメモを見ると、ヨスミ女は、そのときどきで、同じ話でもいろいろに書いているということがわかる。

これらのメモをどのように分析して記憶呼び戻しの法則性を見い

出したらよいか皆様の御教示をいただきたい。

記憶の呼び戻しは、昔話の語りにかかわる重要な問題だと思う。この解決は、口承文芸研究だけでは解決はつかないかとも思う。大脳生理学や心理学と、当学会からの将来の学際的研究にまたねばならないであろう。

ヨスミ女の昔話六一八話全部とその昔話メモすべての出版を志し、六十一年五月中に公刊の予定であったが、諸般の事情により出版中断の憂目になっており、ヨスミ女が抜群の語り手であったがゆえに、昔話研究進展のため残念でたまらない。

(昭和六十一年六月七日、遠野大会に発表)

【注】

- 1 拙稿「昔話の語り手と聞き手」(『昔話の語り手 昔話—研究と資料』九号、昭和五十五年・三弥井書店)
- 2 拙稿「越後の語り手—波多野ヨスミ」(野村純一編『昔話の語り手』一九八三年・法政大学出版局)
- 3 小河内芳子「ストーリーテリングの実践」(野村純一・佐藤涼子・江森隆子編『ストーリーテリング』昭和六十年・弘文堂)
- 4 水沢謙一『昔話ノート』(昭和四十四年・野島出版)
- 5 注4
- 6 武田正「宿場町檜下と佐藤家の昔話—解説に代えて—」(『佐藤家の昔話』(昭和五十七年・桜楓社))
- 7 注4

(さくま・じゅんいち)